

2025年2月2日被献日説教

マラキ書 3章1－4節

ヘブライ人への手紙一 2章14－18節

ルカによる福音書 2章22－40節

本日は被献日です。2月2日、固定の祝日ですが、本年は日曜日となりますので、主日礼拝として行います。正教会やカトリック教会でも名称は異なりますが祝日です。本日の福音書の記述に基づいて、40日の清めの期間を過ぎた母マリアが、夫ヨセフとともにエルサレム神殿を訪れ、産後の清めと初子の男子イエス様を神殿にささげ聖別してもらったこと、そこでシメオンとアンナに出会ったことを記念します。ことにシメオンが幼子イエスを見て「**異邦人を照らす啓示の光**」(ルカ 22:32)と表現したことから、光をテーマにした様々な形の礼拝が行われます。新しい年を迎えても戦いや紛争の終わらない今、希望の光を世界中の人々とともに、本日確認することは、意味深いといえます。

本日は、福音書を中心に学びます。本日の福音書は、二つの部分に分かれます。一つは、律法に従って、清めの期間を守り、また初子の男子であるイエス様を神殿に捧げて、聖別してもらおうとする両親ヨセフとマリアと、聖霊に導かれてシメオンが、神殿で出会うお話(ルカ 2:22～28節)です。もう一つは、シメオンとアンナが幼子について預言を語る個所です(ルカ 2:29～40節)です。

最初のお話は、ユダヤ教の律法という事柄と主なる神様の聖霊という事柄とが矛盾するのではなく、一致する所にイエス様がおられることを示します。「**モーセの律法に定められた清めの期間が満ちると、両親はその子を主に献げるため、エルサレムへ連れて行った**」(ルカ 2:22)のですし、シメオンは、「**正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。また、主が遣わすメシアを見るまでは死ぬことはない、とのお告げを聖霊から受けていた。**」(ルカ 2:25-26)からです。一般的に宗教改革を経たプロテスタント教会において、律法は完全に放棄されて、信仰のみが重要だと言われます。また聖霊の働きこそが大事だといわれる場合もあります。しかし、ルカ福音書のこのお話は、律法と聖霊とが一致する点にイエス様がおられることを示します。それは律法と信仰は、相対する事柄ではなく、イエス様によってそれら二つが一致することによって、新しい事柄が生まれることが大切だということです。

二つ目のお話は、イエス様を中心にした律法と信仰の一致が何を生み出すかについての証です。このお話では、人間の年齢という意味で、時間的な事柄も関係しています。幼子イエスを与えられたばかりの若い夫婦ヨセフとマリア、その歩みを、律法に基づいて、これから本格的に始めようとする二人に、救い主の誕生を長い人生の間、待ちつづけたシメオンとアンナという老人が、聖霊に導かれて出会います。生きている時間の長さが異なる二人が、ここで出会うのです。その中心にもイエス様がおられるのです。

シメオンに注目して見ますと、彼は、「**イスラエルの慰められるのを待ち望み**」(ルカ 2:25)と、いつ救い主が出るかという見張り人の役割を担っていました。そして幼子イエスに出会い、「**主よ、今こそあなたはお言葉どおり、この僕を安**

らかに去らせてくださいます。私はこの目であなたの救いを見たからです」(ルカ 2:29-30) と、幼子に救いを見て、体験したので、安らかに去ることが出来ると賛美を歌います。このシメオンの賛美には、喜びがあり、その喜びの背景に、長い人生が主なる神様への感謝のみで貫かれていることがあると思います。しかし、大切な事柄は、彼がそのような「**正しく信仰があつい**」(ルカ 2:25) ということだけではなく、「**聖霊が** (2:25)、**聖霊から** (2:26)、**霊に導かれて** (2:27)」と聖霊によって導かれている点です。聖霊降臨の出来事は有名ですが、この被献日においても聖霊は人を動かし、大切な事柄を示したのです。シメオンは、聖霊によって導かれた深い霊的洞察によって、イエス様を見て、この幼子にこそ、人間の罪の根底に迫る救いがある、代々準備された救いがあることを見たのです。聖霊によるこのシメオンの導きは、決して彼だけのものではありません。ローマ帝国は、イエス様の登場以降、帝国としての安定期に入り始めますが、主なる神様の意思とは異なり、あらゆる力がはびこる世界です。その世界の中で、シメオンはまだ小さく無力は幼子に救いを見たのです。これは現代の私たちにとっても極めて意味深いことです。アンナに関していうと、その預言の言葉は記されていませんが、「**エルサレムの贖いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを語った**」(ルカ 2:38) と、イエス様が未来にもたらす救いの証言者となったことが報告されています。

他方で、イエス様の両親ですが、彼らは「**父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いた**」(ルカ 2:33) とあり、親でありながら、若さのためかイエス様の出来事を理解出来ないのです。それ故に、人生の先輩であるシメオンは、まず彼らを祝福します(ルカ 2:34)、そして、それから「**御覧なさい、この子は**」と、人間の思考を全く越えた預言、これから起こるイエス様による蹟きについて語るのです。それは、幼子であるイエス様が示す希望が、蹟きがあるからこそ、人間の思い通りの希望、あるいは特定の人間だけに当てはまる希望ではなく、全ての人間の希望だということです。

この希望は、イエス様の出来事を通して最も明確に示されたのですが、それはすでに過去においても示されていました。本日のマラキ書に「**私は使者を遣わす。彼は私の前に道を整える。あなたがたが求めている主は、突然、その神殿に来られる。あなたがたが喜びとしている契約の使者が、まさに来ようとしている**」(マラキ 3:10) と、一旦滅びを経験した王国の人々に希望を語っていました。また、ヘブル書が「**それは、ご自分の死によって、死の力を持つ者、つまり悪魔を無力にし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた人々を解放されるためでした**」(ヘブル 2:14-15) と記す通り、死を未来にもつすべての人間に存在する希望です。

今日礼拝は、いつものろうそくとは別に、特別に光を灯していると思います。それはイエス様による希望の光のしるしです。キリスト者とは何か、いろいろな定義がありますが、常に希望を持ち続ける人であるといえます。本日の灯はその証です。これからも、主なる神様が、私たちに救いの創始者であるイエスを遣わされたということを、理論ではなく、事実として深く味わいたいと思います。